

博士論文要旨

論文題名：植民地朝鮮における民衆宗教の展開

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

パク ヘソン

PARK Haesun

本稿は、植民地朝鮮における民衆宗教の展開を取り上げて分析することで、そこに見られる「植民地近代」の諸問題を考察したものである。

第一章では、東学の後天開闢思想が持つ特質について検討した。開闢の語はもともと、天地と万物のはじまりを意味するものであった。しかし、朝鮮においては、それが乱れた世の終末と理想世界（後天）の到来という意味に読み替えられた。従来の循環論的宇宙論とは確然と区分されるこの後天開闢思想は、一七世紀以降の邵雍の象数論と先天学をめぐる学問の動向、ならびに英祖在位期に発された「混沌開闢論示」によってその可能性が芽生えたものであった。本章では、民衆宗教である東学が、この可能性を継承しながら独自の教理を整えていったことを明らかにした。

第二章では、植民地朝鮮の民衆から圧倒的な支持を得た普天教の活動を取り上げることで、「類似宗教」が直面した様々な課題とジレンマについて検討した。姜甌山の死後、信仰の正統性をめぐって諸分派が競合するなか、普天教は民衆の独立への期待に符合する「甲子登極説」の利用及び秘密布教方式の固守を通じて主導権を握った。その後、朝鮮社会で公式的な活動を開始するも、朝鮮の知識人と当局のどちらからも受け入れられず、徐々に孤立していった。両者が普天教を排除した根底には、民衆の啓蒙を阻害する邪教、朝鮮独立を支援する不穏団体といった認識があった。そしてこれは、当時の「類似宗教」に対する認識そのものであった。本章では、普天教がそうした抑圧を受けつつも、『時代日報』買収や時局大同団の結成、日本の大本教との交流を通じて現状打破を模索する過程を辿り、それにもかかわらず一九三六年に強制解散せざるをえなかったことの意味を問うた。

第三章では、真宗大谷派同朋教会と金剛大道との間の合同・分裂の過程を検討した。日本仏教による朝鮮布教の低調が指摘されるなかで、真宗大谷派は新都内布教所の開設に成功した。同布教所は、朝鮮人信者で構成された最初の日本仏教の布教所であった点や、その所在地が聖地としての象徴性を有していた鷄龍山新都内であった点により、大いに注目された。そして布教所の設立は、同朋教会と金剛大道による合同の産物であった。一方、この合同は、金剛大道が近代宗教化をなし遂げる際の主要因にもなった。同朋教会との合同のさなかに醸し出された種々の緊張関係や葛藤、そして組織の体系的な整備、経典発行の経験等は、金剛大道の近代宗

教化に決定的なきっかけを与えたからである。このように本章では、従来の二項対立的な枠組だけでは決して説明できない、日本仏教と朝鮮の民衆宗教との間の微妙な関係性に迫った。

第四章では、植民地朝鮮において植民権力の手によりなされ、現在の「鄭鑑録」理解の前提となっている公刊本『鄭鑑録』の誕生過程を検討した。一九一〇年代に在朝日本人による「鄭鑑録」蒐集及び研究が行われていくなかで、鮎貝房之進と杉山萼の底本が作成された。この二つの底本と当時幣原坦が所蔵していた「鄭鑑録」とを比較してみると、幣原本と杉山本との間には類似性が見られたものの、鮎貝本は二者とは明らかに異なっていたことが確認された。この鮎貝本を公刊本の形で世に発表したのが細井肇の『鄭鑑録』である。それ以降、当時の出版業者が次々と様々な『鄭鑑録』を刊行していったことで、一種の鄭鑑録ブームが発生した。このように本章では、これまで不分明だった『鄭鑑録』をめぐる基礎的な事実関係について明らかにし、その意味を考察した。

第五章では、植民地期における、様々な勢力による「鄭鑑録」の利用及び排除の様相について検討した。植民地化の危機が現実化しつつあった大韓帝国末期以降、「鄭鑑録」はそうした危機意識と表裏する形で、民衆の間で強い影響力を発揮しており、それは基本的には総動員体制下にあった一九四〇年代まで続いた。一方で、植民地朝鮮にあって「鄭鑑録」は、単に民衆の待望という形だけでは捉えることのできない、複雑な利用のされ方をしてきた。「鄭鑑録」は、植民地朝鮮において種々の思惑が複雑に絡み合いながら、民衆ないし民衆宗教のみならず、植民権力、朝鮮の知識人など様々な勢力によっても利用されていた。本章では、そのような「鄭鑑録」の利用及び排除の様相から逆照明される、植民地朝鮮の姿を描き出そうと試みた。

終章では、序章から第五章までの論点を整理し、全体の総括を行った。